

吉田 歆著

『古代の都はどうつくられたか』

——中国・日本・朝鮮・渤海——

(歴史文化ライブラリー 313)

吉川弘文館 二〇一一年・二刊
四六二四〇頁 一七〇〇円

本書の著者である吉田歆氏は、日本古代都城を研究対象とし、先年、『日中宮城の比較研究』（吉川弘文館、二〇〇二年）を刊行するなど、日本と中国の都城を比較検討する手法を取ること、都城中枢部である宮城の構造や使用状況を説明している。本書は、前著での検討結果を踏まえつつ、紀元前二世紀から紀元後一〇世紀までの間に展開した中国・日本・朝鮮・渤海における都城の建設理念を一般の読者に向けて説き明かしたものである。以下、本書の構成と内容を紹介する。

「中華帝国の都」では、前漢長安城から隋唐長安城に至る中国歴代都城の構造を解説する。とりわけ、隋唐長安城を古代東アジアにおける都城の「グローバル・スタンダード」と捉え、その特徴を四点に集約する。すなわち、(一)都城全体が、朱雀門街を中軸線として東西対称とされる点、(二)宮城のスペースと官庁地区である皇城のスペースが明確に区別され、かつ都城の中央北詰に隣接して配置される点、(三)『周礼』考工記の記述に基づく宮室制度である三朝制を導入し、宮城の空間を内朝・中朝・外朝に区

分した点、(四)宮城・皇城と外郭が分離され、外郭に坊（囲壁居住区画）が設けられた点である。さらに、従来の都城と隔絶した平面プランを有する隋唐長安城が、国内外に隋唐帝国の権威と力を誇示する「帝国型都城」であったことを指摘する。

「日本の都」では、平城京が都城の中央北詰に宮城を置き、そこから南下する朱雀大路を都城全体の中軸線としていたことを述べる。一方、隋唐長安城と異なる点も指摘する。それは、外郭城牆が南側の羅城門両脇にしか築かれなかった点、坊牆が朱雀大路両側の区画にしか築かれなかった点である。著者はこのような不徹底さの理由を、日本が自らを周辺諸国から朝貢を受けるべき存在と位置付け、隋唐長安城の持つ「帝国型都城」のエッセンスを外交使節の目に触れる部分にのみ導入したためとする。

「朝鮮三国の都」では、隋唐長安城が提示した「グローバル・スタンダード」のエッセンスを、高句麗・百濟は消化できずに滅亡し、新羅は慶州を都とすることに固執して積極的に導入しなかったことを指摘する。

「海東の盛国渤海の都」では、上京龍泉府の宮城・皇城の配置、外郭城内における坊の設置など、隋唐長安城と類似する点を挙げ、その一方、宮城最奥部の宮殿に伝統的な床下暖房施設が設置されていたことから、渤海独自のスタイルも見られるとする。

このように、著者は東アジア諸国の都城構造を分析した上で、「グローバル・スタンダード」の受容とは、単にその形を模倣するのではなく、その背景をなす統治理念を理解し、各国の事情に応じて解釈・選択して受け入れることと結論付けている。

本書は、これまでに公表された多数の研究成果を参照して都城研究の現段階を明示しており、隋唐以前の東アジア都城の全体像を見渡すには、恰好の指南書となろう。また、東アジアの都城を比較し、共通点・相違点を一般の読者向けに平易に解説した書は、これまでほとんど見られなかった。このような意味においても、本書の刊行は意義あるものといえよう。

(角山典幸)